

ISAPH

アイサップ
ニュースレター

第13号

News Letter

2012年8月25日発行



写真：健康教育のため作成したTシャツを着用して



ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health



ラオスからの報告

チャンパサック県での 母子保健事業視察

ISAPHラオス事務所

平成24年6月25日～29日の5日間、チャンパサック県で行われている母子保健事業の活動視察を総勢11名（カムアン県保健局1名、セバンファイ郡保健局7名、ISAPH3名）で行いました。今回の視察の目的は、チャンパサック県保健局母子保健課の指導のもと行われているバチヤン郡病院とヘルスセンターでの健康教育を視察し、今後のセバンファイ郡地区での健康教育をより効率的かつ効果的に実施できるようにすることです。

視察の前にチャンパサック県保健局副局長を表敬訪問し、カムアン県保健局のISAPHカウンターパートから今回の視察目的等が説明されました。その後、母子保健課職員から県保健局が実施している健康教育活動の概要報告があり、引き続き意見交換を行いました。

翌日はバチヤン郡病院とヘルスセンターでの健康教育活動を視察しました。ここでは妊婦を中心に健康教育を行っており、まずは妊婦全員へ健康教育を実施した後、さらに3つのグループ（妊娠1～4カ月、5～7カ月、8～10カ月）に分け、月齢に応じた内容で健康教育を行っていました。活動を見学した後、セバンファイ郡病院母子保健課職員は「すぐには月齢ごとに分けて健康教育を実施できないが、まずは母親と妊婦



意見交換の様子



バチヤン郡病院での健康教育

のグループに分け健康教育を実施し、将来的には妊婦を小グループに分け月齢に対応した健康教育を行いたい」と意気込んでいました。最終日には県保健局母子保健課を訪問し今回の活動視察の総括を行うとともに、セバンファイ郡内で実施しているモバイル活動やISAPHの支援内容について説明を行いました。

今回、健康教育活動の視察や活動実施者たちと意見交換ができたことは、健康教育を実践しているセバンファイ郡職員にとってよい刺激になったと思います。この活動視察で得たことを、モバイルクリニック活動時の健康教育へ応用し、これまで以上に住民たちが理解しやすい健康教育を実施できるよう努力してくれることを期待しています。

ラオス母子保健プロジェクト 第3期MOUの締結

ISAPH事務局

ISAPHによるラオスでの母子保健プロジェクトはフェーズ3を迎えました。フェーズ3の実施にあたり、平成24年2月20日にラオス政府と新たにMOU（了解覚書）を締結しました。今回のMOUは、フェーズ



調印の様子

2の成果を他の地区に普及することを主な目的としています。

ラオス母子保健プロジェクトのフェーズ2は、平成23年12月に終了しました。活動地域はフェーズ1と同様、カムアン県セバンファイ郡カンペタイ地区・カシ地区・シーブンファン地区の3地区で、活動内容は2つのプロジェクトで構成されていました。一つは従来の保健ボランティアと郡保健局スタッフなどを核とした住民参加型の母子保健活動です。もう一つはシーブンファン地区で栄養の問題により乳児死亡が多発したことを受け、栄養の改善を主軸として独立行政法人国際協力機構の草の根技術協力事業（以下「JICA草の根事業」）の資金援助を受け実施した「生き生き健康村づくりプロジェクト」です。乳児死亡の低減を重視したことから、JICA草の根事業が活動の主体となりました。基本的な方針としては、まず生き生き健康村づくりプロジェクトによりシーブンファン地区において栄養・衛生状態改善の基盤を築き、その活動手法を他の地域に普及していくことでした。

フェーズ2の活動の中でISAPHが得たものは、住

民参加型の健康教育手法です。「住民が分かりやすく、楽しく、興味をもって学べる」ことを目標に、内容が画一的にならないようカウンターパートと共に創意工夫を行い住民参加型の健康教育を実施してきました。その中で絵人形を使用したパネルシアターやロールプレイなどにより、住民が楽しみながら学んでいく様子を実感することができました。

フェーズ3では、このような成果の要となった健康

教育手法を、活動のカウンターパートであるセバンファイ郡職員を中心に他の2地区やカムアン県内の他の郡にも普及すべく、ラオス政府とMOUを締結しました。住民参加型の保健活動がラオス人カウンターパートと住民によって行われるようになることを願い、今後も支援をしていく考えです。今後とも皆様のご支援、ご協力を切にお願いいたします。

寄付金による支援の報告

ISAPH事務局

ISAPHは皆様からいただいた寄付金ならびにiサイクル（ペットボトルキャップ回収）の収益金により、貧困で粉ミルク代・治療費・出産費用などが支払えない住民を対象とした支援をしています。平成23年度はラオス・カムアン県の活動地域で、母乳が出ない母親の子ども延べ44人へ粉ミルクや哺乳瓶を供与したほか、リスクのある妊婦の出産に関わる費用や、感染症の治療費など、38人について県・郡病院とともに支援しました。今回は、平成24年度に行った支援をいくつかご紹介します。

シーブンフアン地区ドンマークバー村

母親：ノイ 子：ゴイ（女兒）

母乳がでなかったために、以前は水で薄めたコンデンスミルクで子どもを育てていましたが、郡保健局職員の度重なる健康教育の結果、生後5カ月以降は母親が粉ミルクを購入し与えるようになりました。しかし、

ミルクの調整がうまくできずに非常に薄い粉ミルクを与えていたうえ、貧困のため十分な量の粉ミルクを子どもに飲ませることができずにいました。さらに下痢が続き、体重が1カ月前からほとんど増えていない状態であることが分かったため、下痢症の治療費の一部をISAPHが負担し、粉ミルクや哺乳瓶を供与することにしました。母親への栄養指導はその後も継続的に行っています。

シーブンフアン地区ブンフアナー村

母親：ライファイ 子：クンカム（男児）

これまで6人の子どもを出産しましたが、その内3人は生後3カ月以内に死亡しており、母乳を与えたために子どもが亡くなったと信じこんでしまい、6人目の子どもは水で薄めたコンデンスミルクや牛乳で育てていました。しかし日に日に子どもの元気がなくなってきたため、ISAPHへ支援の依頼がありました。粉ミルクで育てたくても、その購入費を工面できない状況にあったからです。その後、子どもは支援により受け取った粉ミルクを良く飲み、少しずつ元気になってきたとの報告を受けています。引き続き経過観察を行う予定です。



ISAPH職員が母親へ粉ミルクの調整方法を指導している様子



粉ミルクによる支援を受ける母親と子ども



郡保健局が母親へ栄養指導を実施している様子

アイ

iサイクルより寄付をいただきました



ISAPH事務局

平成24年1月～5月までのペットボトルキャップ収益として、iサイクルより34,600円（キャップ692,010個分）の寄付をいただきました。ありがとうございました。

スタディツアー

平成24年7月4日～6日に、琉球大学医学部のスタディツアーの受け入れを致しました。
参加者は4名（引率者1名含む）でした。

母子保健スタディツアーに参加して

琉球大学 医学部医学科 阿武 和

7月4日から6日までの3日間、ISAPHのスタディツアーに参加させていただきました。ラオスへはこれまで一度も行ったことがなく、事前に調べていたが情報があまりなかったので、実際にラオスの医療機関や看護学校などを視察させていただいた際には驚きの連続でした。なかでも母子保健活動の視察では考えさせられるものが多く、非常に印象に残りました。

タケはラオスの地方都市で、5番目に大きい都市ですが緑が多くのだかな住みやすい都市でした。この地方では産後などに母親の食べものを厳しく制限する食物タブーが存在しており、それにより母親のみならず母乳を飲む乳児が栄養失調に至り高い乳児死亡率となっていました。食物タブーの内容は部族や家庭によっても異なっており、それを食べたら不吉なことが起きるなどという迷信により食べものが制限されています。この状況を改善するための活動をISAPHは行っていました。ISAPHの活動により乳児死亡率は低下して

おり、栄養指導や手洗い及び飲み水についての健康教育などにより栄養摂取状況や衛生行動も改善し、活動の成果が出ているように感じました。

食物タブーの存在自体、実際にラオスに行き母子保健活動を見るまでは真実味がなく日本との差を非常に感じました。今回のスタディツアーに参加することで、国際貢献というものが身近に感じられるようになりました。また、日々精進し将来医師となり自分も何らかの活動へ参加し、医療貢献ができるようになりたいと強く感じました。とても貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。



セバンファイ郡病院前にて

ラオスでのISAPHの母子保健活動について

琉球大学 医学部医学科 藤原 雅和

この度、ラオスでのISAPHのスタディツアーに参加させていただきました。今回はラオスの南部に位置するカムアン県を訪れましたが、私は沖縄出身であり、沖縄とラオスにはともに雨が少なく温暖な気候であるということだけでなく、時間にルーズなところや優しい人柄など多くの共通点があるように感じ、集落の様子も沖縄の原風景を見ているようでした。

そんなカムアン県での視察で特に印象に残ったのが母子保健活動です。そこでは、乳幼児の体重・身長測定、予防接種、妊婦健診、母子の健康増進に関する健康教育を行っていました。健康教育ではISAPHの職員がパネルを用いて分かりやすく説明をし、集まった数十人の住民の方々は熱心に聞いていましたが、私は事前にラオスの人々はあまり時間を守らないと聞いており、集まる住民はまばらかもしれないと予想していたので

驚きました。その光景から、ISAPHの母子保健活動が住民の方々に理解され、かつ必要とされているのだと思いました。

遠い日本から来たISAPHは当初、現地の人々の理解を得ることに苦労したそうですが、今回の視察では現地の人々から多くの信頼を得ているように見え、ISAPHの地道な活動が実を結んでいるのだと思いました。今回このような貴重な機会を与えてくださった椋さんをはじめISAPHの皆様には深く感謝し、これを機に日本の国際協力について考え、将来何らかの形で尽力できればと思いました。



カムアン県病院 病院長表敬訪問終了後の集合写真

スタディツアーに参加して

琉球大学 医学部医学科 塩見 あすか

7月4日～6日の間スタディツアーに参加させていただき、ラオス国カムアン県セバンファイ郡で行われている母子保健活動を視察しました。その主な内容は栄養や衛生に関する健康教育と、身体測定やワクチン接種を行うモバイルクリニックです。これらの活動が開始された2年ほど前は、地元の人々は見向きもしなかったようですが、ISAPHの皆さんの献身的な活動により、いまでは集会所がいっぱいになるほど人々が集まるようになり、乳児死亡率も着実に低下しているそうです。

プロジェクトマネージャーのお話によると、一方的な考えを押し付けるのではなく、地元の人々の慣習を大切にしつつ、多面的な視点を取り入れながら柔軟に活動方針を修正しているそうです。全く環境の異なる異国の地で、このようなNPO活動を行うのは強い信

念を持っていなければなかなかできないことだと思いますが、決して独善的になることなく、地元の人々の思いを第一に考えて活動されていることに非常に感銘を受けました。この経験を忘れることなく、今後の医師としての人生に活かしていきたいです。本当にありがとうございました。



ISAPH職員の説明を聞きながら、健康教育を見学する様子



健康教育の風景

ラオス プロジェクト関係者の紹介

カウンターパート ソムサヌック・アルルート 氏



私はカムアン県保健局科学調査課課長のソムサヌック・アルルート57歳です。2011年の秋からISAPHのカウンターパートをしています。これまでに、カムアン県保健局副局長やカムアン県病院長、医療系援助団体等のカウンターパートを経験してきました。

参加した活動視察には、琉球大学の公衆衛生関連業務、フランスの病院管理業務、タイの母子保健関連業務があります。最近では、ISAPHの支援によりチャンパサック県保健局母子保健課の活動を視察しました。私はISAPHのカウンターパートであること、また、カムアン県セバンファイ郡シーブンファン地区・カンペータイ地区・カシ地区の母子の健康改善のために支援をしていただいていることをたいへん嬉しく思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

保健ボランティア シースパン・ペットガイソーン 氏



私の名前は、シースパン・ペットガイソーンです。年齢は50歳です。看護について勉強した後、1985年からセバンファイ郡シーブンファン地区トゥン村ニャイ集落で保健ボランティアをしています。保健ボランティアとしてのスキルアップのため、毎年1回、セバンファイ郡保健局で開催されている保健ボランティア研修に参加しています。

現在、月に1度セバンファイ郡保健局やISAPHと共に母子の健康状態向上のための活動をしています。ISAPHと仕事ができることを大変嬉しく思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



新生児死亡率の低下を目指し、 保育器を供与

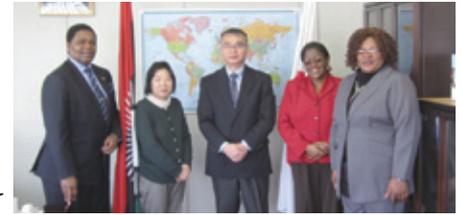
ISAPH事務局

ISAPHでは、現在マラウイ共和国での栄養教育、衛生教育、食事指導などの活動を主とした北部ムジンバ県ムジンゲ村などで、乳幼児の栄養状態改善を目的とした「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」を計画しています。

このプロジェクトを開始するにあたり、マラウイ共和国での法的な手続きに関する情報を収集すべく、平成24年2月13日にISAPHの齋藤智子職員とISAPHアドバイザーの山崎裕章氏（聖マリア病院国際事業部）が駐日マラウイ大使館を訪問しました。その際、特命全権大使であるルーベン・ングウェンヤ氏より、「大統領夫人（当時）が母子保健改善の活動を行っており、保育器の必要性を訴えているので支援をお願いしたい」との要請がありました。マラウイ共和国では、妊婦の栄養不足などが原因で未熟児として生まれる子どもが



保育器の発送準備をする山崎氏



大使公室にて

多く、未熟児は体温調整機能が正常児より低いため入院期間中は保育器が必要です。このようなことから、新生児死亡率（29人／出産1,000人）を下げるための一つとして保育器が役立ちます。

聖マリア病院には国内でも有数の新生児センターがあり、そこで使われていた保育器4台をメンテナンスし、海外でも使えるように変圧器を付け、平成24年5月22日にマラウイ大使館へ発送しました。

事務局からの報告

保健医療経営大学での講義

ISAPH事務局 磯 東一郎

平成24年7月3日に保健医療経営大学において「NPO法人ISAPHによる国際協力と公的援助との関わり」というテーマで講義を行いました。国際協力の知識があまりない学生が対象でしたので、国際協力への理解を深めてもらうことを目的に、興味を持って話を聞いてもらえるように心がけました。

まず開発途上国を取り巻く状況についてお話した後、日本の援助の方針やODA（政府開発援助）の事業とNPO事業の違いを説明しました。その話の中で、文化・習慣・宗教などがまったく違う環境での国際協力の難しさや、やり甲斐、そして活動の基本となるコミュニケーションの重要性などは興味を持って聞いていただけたようです。NPOの実際の活動については、相手国との協定により活動内容だけでなく、それに伴う成果の達成状況なども問われるようになりODAに近づいている状況も伝えながら、ラオスでの母子保健プロジェクトを紹介しました。

受講者アンケートのコメントには、多種多様な問題を抱える開発途上国の実情、文化や習慣が違う中での

活動の難しさ、援助する側と援助を受ける側のニーズに隔たりがあること、そしてそれらの障害を乗り越えるためには密なコミュニケーションが必要なことなど、重要なポイントが挙げられていました。ISAPHの活動については、開発途上国における恵まれない保健医療状況下での活動の難しさや重要性、そしてラオス母子保健プロジェクトでの子供の健康と命を救う活動の意義などをご理解いただけたことが伺えました。また、ペットボトルのキャップ回収によるiサイクルのエコ活動収益金が、ラオスの赤ちゃんのビタミンB1欠乏予防や貧困者の医療費として有効利用されていることが理解できたという回答もありました。

このような講義を行うことで国際協力への理解を深めてもらい、更にはISAPHの活動を知ってもらえるように今後も努力したいと考えています。



講義の様子



理事就任のご挨拶

ISAPH理事 江藤 秀顕

平成24年4月1日付けでNPO法人ISAPHの理事を拝命いたしました。私は長崎大学医学部を卒業後、熱帯医学研究所や東京女子医科大学で25年にわたり熱帯医学に関わってまいりました。今までにアフリカやアジア太平洋諸国でのマラリアやエイズに関する調査研究活動に従事してきましたが、2004年のISAPH設

立当初に行ったラオス国カムアン県の村落におけるマラリア調査の際には、ISAPH現地職員の協力を得て実施したことを懐かしく思い出します。

その後も保健医療活動や女子医大学生のスタディツアーで現地事務所や職員に大変お世話になった次第です。平成24年8月から女子医大を離れ御殿場市にある神山復生病院での勤務に変わりますが、これまでのフィールド調査経験を活かした現場の視点から理事としてのお役に立てればと思います。今後ともよろしく願い申し上げます。

入会金廃止のお知らせ

ISAPH事務局

ISAPHの会員になるためには、今まで入会金（法人会員30,000円／一般会員3,000円）が必要でしたが、一人でも多くの方にご入会いただくために、平成24年6月1日から入会金を廃止し、年会費（法人会員30,000円／一般会員3,000円）のみとしました。ISAPHの活動をより一層発展させるために皆様からのご協力を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。



成長モニタリングで体重測定を行っている様子



健康教育用のポスターと石鹸を配布しました



妊婦健診を受ける母親

平成23年度収支決算報告

項目	金額	内容
前年度繰越金	3,114,467	
収入	6,595,846	収入合計
収入内訳	833,000	会費など
	4,664,999	JICA関連
	888,000	スタディツアー
	179,227	寄付、その他
	30,620	諸雑費
支出	6,190,854	支出合計
支出内訳	1,093,899	ラオスプロジェクト
	3,582,827	JICA草の根事業関連
	394,439	スタディツアー
	1,119,689	管理部門
収支差	404,992	
23年度末期預金額	3,519,459	

平成24年度予算

項目	金額	内容
前年度繰越金	3,519,459	
収入	3,500,000	
収入内訳	1,000,000	会費など
	2,000,000	スタディツアー
	500,000	補助金、寄付金など
支出	3,500,000	
支出内訳	1,000,000	ラオスプロジェクト
	1,000,000	スタディツアー
	200,000	マラウイ事業
	300,000	予備費
	1,000,000	事務局事業費（国内）
収支差	0	
24年度末期預金額	3,519,459	

最近のできごと

2012年3月～7月

- 3月26日 JICA 専門家からラオス事務所へ古着 1 箱寄付

- 4月 1日 江藤秀顕氏がISAPH 理事に就任

- 5月12日 JICA 専門家からラオス事務所へ古着 1 箱寄付

- 5月23日・31日 セバンファイ郡保健局にてラオス母子保健プロジェクトに関する会議を実施

- 6月25日～29日 チャンパサック県母子保健事業活動視察実施

- 7月 4日 特定非営利活動促進法の改正に伴う定款変更手続きの実施

- 7月 4日～ 6日 琉球大学スタディツアー受け入れ

- 7月18日 ISAPHの支援により設置した井戸のモニタリング実施
(シーブンファン地区ブンファナー村)

- 7月20日 ISAPHの支援により設置したトレイのモニタリング実施
(シーブンファン地区ブンファナー村ドンサワン集落)



入会と寄付のお願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員 年会費：30,000円

一般会員 年会費：3,000円

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、当東京事務所までご連絡いただければ幸いです。

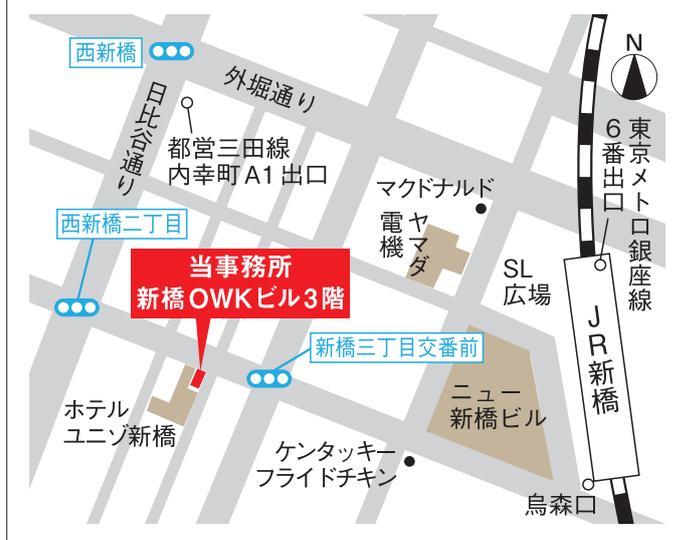
【振込先】

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人 ISAPH
口座番号 00180-6-279925

特定非営利活動法人 ISAPH 東京事務所

〒105-0004
東京都港区新橋3-5-2 新橋 OWKビル3階
TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165
E-mail tokyojimusho@isaph.jp
URL <http://isaph.jp/>

東京事務所案内図



【ISAPH ニュースレター 第13号 編集スタッフ】

石原 潤子 / 磯 東一郎

ISAPHの役員名簿

役職	氏名	備考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学名誉教授
理事	深見 保正	元福岡県企業管理者
理事	湯川 武	早稲田大学イスラム地域研究機構 招聘研究員
理事	樋口 敬記	梓設計九州支社特別顧問
理事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部
理事	江藤 秀顕	神山復生病院
監事	竹之下 義弘	弁護士 (東京六本木法律事務所)

社会医療法人
雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手義雄 病院長：島 弘志

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115
URL <http://www.st-mary-med.or.jp>

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- A Baby-Friendly-Hospital-Initiative (赤ちゃんにやさしい病院) WHO・ユニセフ指定
- 日本医療機能評価機構認定施設 (一般病院 Ver.5.0)
- 総合周産期母子医療センター (NICU・MFICU)
- 福岡県救命救急センター
- 地域医療支援病院
- がん診療連携拠点病院
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 日韓医療技術協力指定病院
- 自動車事故対策機構療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 福岡県肝疾患専門医療機関

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。